

細懇切なる索引の附いてゐることも從來のものと同様である。本巻の利用價值を大に高からしむるものである。筆者は本叢書の全體系が次第に完成に近づきつゝあることを喜び、完成の日を待望するものである。最後に本巻と共に第九第十巻に参照すべき Volume of Plate IV が別巻として出版されてゐること附記しておく。(Cambridge Ambridge at the Univ. Press. XXXII+1057. 1934.)

37 Shilbing)

(顯見)

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

昭和十年卒業論文題目

國史專攻

- 藤原時代の佛教と貴族 足立 修平
- 近世封建社會と奢侈生活 入江 春男
- 幕末に於ける維新思想 岩田 稔郎
- 幕末武士の生活相に就いて 内田 健一
- 中世に於ける政治觀の一考察 大貫 俊雄
- 近世中期に於ける復古的精神の一考察 岡 潔
- 明治維新と士族 小林 健一
- 足利時代の社會問題 志水 輝彦
- 庄園生活の一考察 田中 稔
- 新井白石の學問と近世社會 竹脇 榮三
- 鎌倉武家社會に就いての一考察 津守 健二

封建社會と都市生活

泊 忠雄

中世史學史に就いて

内藤 晃

國學者の國家觀

中村 雄光

頼母子無盡の一考察

丹羽淺次郎

咒術と我が古代思想

野口 隆

近世初期の排佛思想に就いて

原山 淑夫

藤原時代一般貴族の精神的傾向と宗教心とに就いて

本田 善自

て

御成敗式目冒頭の精神

本田 友重

奈良朝及び平安朝初期に於ける佛教思想の一考察

湯淺 快龍

明治文化史上に於ける新聞文化の研究

吉田 太六

東洋史專攻

宋代の銅禁

荒木 敏一

宋代の士大夫生活に就いて

板谷 末造

元朝文化史上に於ける色目人の存在

愛宕 松男

唐代の兩稅法に就いて

岡本 午一

宋代の土地問題

北山 康夫

北宋時代の茶法

佐伯 富

東周西漢新樂發達の事情

高村 考治

南宋の紙幣に就いて

寺西 勝隆

支那古代人身犠牲の風習

中谷 英雄

東晉時代の貴族と佛教

宮川 尙志

西洋史專攻

Anglo-Saxon 時代の Manor に就いて

薄井 寛介

南北戰爭の原因に就いて

甲斐不二男

重商主義時代に於ける英國の專賣特許に就いて

金子 幸助

世界大戰の一研究

坪井 豊彦

アメリカ獨立當時の商工業に就いて

廣田 孝一

Beaunarchais, «Le Mariage de Figaro» の一考察

——特に大革命前の France 社會との關聯よりみ

たる——

Castiglione: Il Cortegiano と Ariosto: Le Satire

——Cinquento Hochrenaissance の宮廷史料の

史的解釋——

武藤 醇吉

地理學專攻

奈良縣宇陀地方の地誌的研究

荒木 義信

薩隅の牧馬に就いて

兼子 俊一

本邦舊城下町の一考察——景觀を中心とせる——

小葉田 亮

積雪地方(越後)の地理學的考察

土田 英夫

隱岐列島に於ける人口現象の地理學的考察

西川 榮一

富士西南麓の地誌學的研究

御子柴幸一

矢作川下流平野の農業地理學的考察

村本 達郎

紀州沿岸漁村に於ける水産地理學的研究數内

芳彦

考古學專攻

The Dawn of Ceramic Art in China

中村 清兄

○讀史會

一月例會 一月三十一日午後六時より樂友會館に於て

開會、三回生入江、小林、津守、原山、本田善、本田友

等諸君各自の卒業論文の梗概を述べ、後大學院學生清水

三男君の「弓削島莊と鹽」と題する研究發表があつた、出席者西田教授外廿餘名。

二月例會 二月七日午後四時半より陳列館第二教室に於て開會、前月に續いて足立、大貫、志水、田中、竹脇等諸君の卒業論文梗概の發表あり。終つて席を三條烏丸佐藤雞店に移し、三回生の爲に豫餞會を開く、西田、中村、藤、魚澄、出雲路、牧野等諸先生揃つて出席せられ盛會であつた。

○西洋史讀書會

例會 第五回例會を昭和九年十二月十三日(木)午後六時より樂友會館第一號室に於て開催、今回は二回生仲野君の左記紹介の後、特に御來會を願つた本學文學部(哲學)講師高坂正顯氏の左記有益にして示唆に富む講演を賜り、活潑なる討論の後同講師に衷心より謝意を表しつゝ十時半頃散會した。出席者高坂講師、時野谷、原兩教授鈴木講師を初め二十六名。

一 W. E. Heiland; The Roman Republic.

二回生 仲野彌壽治君

○東洋史談話會

一、歴史的主体 本學文學部講師 高坂 正顯氏

例會 第六回例會を昭和十年一月三十一日(木)午後六

時より樂友會館第一號室に於て開催、左記二君の讀書紹

介ありて後散會。出席者時野谷、原兩教授、鈴木、岡島

兩講師を初め二十四名。

⑧ Lelevre; La Révolution Française (1930)

二回生 諸井 忠敬吾

⑨ Huizinga; Wege der Kulturgeschichte (1930)

三回生 武藤 醇吉君

卒業生豫饞會 今春三月芽出度く我西洋史學科を卒業

する七君の爲豫饞會を二月七日(木)午後六時より兩替町

二條下ル堺萬に於て開催、時野谷教授及び幹事の送別の

辭、新卒業生總代の答辭ありて後會食に移り、一同七君

送別の名残りを惜みつゝ其洋々たる前途を祝福、歡を盡

して散會したのは十時頃であつた。出席者時野谷、原兩

教授、鈴木、岡島兩講師を初め先輩、新卒業生、在學生

等二十七名。

第四十三回例會 昭和九年十二月十七日(月)夕六時樂

友會館第一號室、參會者二十五名。

一、支那古代人身犠牲の風習に就いて

三回生 中谷 英雄君

人身犠牲には人祭と殉死とあり、人祭を數と盟會の敵

血及その他山河海に對する犠牲の三とする。之は血の方

で惡靈を拂淨し福を招くといふ無智な信仰から起つたも

のでその殉死と異なる所以は、前者は無智より起り後者

が權力關係より起つた點にある。

一、代國史概要 森 鹿三氏

一九二三年佛人ワニエツク氏が一群の秦銅器フンドを

得た大同府東南の李峪は春秋の終、史上に現はれると共

に侈く亡んだ代國の西に當る。代の地名は隋以前三度の

變遷を重ね北魏の崞山縣であつて古く滹沱水、梁山と共

に晉の主する所であり、交通の要地たると共に神聖な所

であつた。

一、支那に於ける學問の起原 宮崎助教

支那の學問はシャーマン教から發達した。神に關する思想も進み、神意を伺ふ方法が發達し巫祝史の様な職業が起る。史から出た學は卜筮で、孔子はかゝる職業的知識としての學に深奥な意味を考へ、學問に理想を與へた點にその學問の祖先としての意味がある。彼以來學の字に對する解釋變り、有職故實としての禮に道德的意義を求め、俗諺であつた詩に深い解釋を加へ、彼は人間の行爲を目標として神意を離れて新しい道德律を作つたのである。

東洋史卒業生豫饒會 昭和十年一月十八日、吉田山東
洋花壇參會者那波、宮崎助教授外十七名。

第四十四回例會 昭和十年一月三十日夕六時半、樂友
會館第一號室、參會者十數名

一、元代に於ける色目人の地位

三回生 愛宕 松男君

色目人文化は元一代を通じて其獨自の存在を續け、漢文化と對立した。之の由來する處として元朝の蒙古主義

との關係を説明した。

一、東晋時代の貴族と佛教 三回生 宮川 尙志君

漢晋文明の推移と佛教、五胡君主と佛教並びに江南佛教との相違、東晋貴族と沙門支遁等との關係、貴族生活に於ける佛教、貴族の沙門に對する經濟的援助、東晋帝室と佛教、佛教に加へられたる批難特に庾水、桓玄の禮敬問題、釋道安、廬山の慧遠と白蓮社等の問題に關して説ぶ。

○支那學會

十二月例會 十二月八日(土)於學生集會所乾室

一、釋園 渡邊 幸三氏

一、唐の天寶時代に於ける河西地方邊防軍の給與に就いて 那波 利貞氏

一月例會 一月二十六日(土)於學生集會所南室

一、道藏沿革 吉川幸次郎氏

一、房山の石浮圖に就いて 小川 茂樹氏

豫饒會 二月九日。於北白川東方文化研究所講堂

一、東晋時代の貴族と佛教 東洋史 宮川 尙志君

一、學校の原始的性質

支那哲 森三樹三郎君

一、唐代音韻考

支那文 青木勝三郎君

講演後同研究所食堂に於て卒業生諸氏への豫饌晚餐會を行つた。

○東方文化學院京都研究所連續講演會

一月三十一日、二月一日に互つて、北白川の同研究所において、藥學博士中尾萬三氏の本草に關する連續講演會が催された。本草諸書の變遷を中心として本草學の發達を概述された。

○朝鮮金海貝塚の發掘

慶尙南道金海郡金海會峴里貝塚内から北九州に見るやうな合口式甕棺が發見されたのを機會に、昨年十二月二十九日より一月十五日にかけて總督府の手によつて調査された。その結果は箱式棺五、合口式甕棺二、豎穴二等が從來知られてゐたドルメンの南側、約四十坪の地區において群在してゐるのが確められた。箱式棺はいづれ

も板狀の割合を組合せたもので、南の崖に近い四段積み
の石垣によつて區劃された一段と低い場所から發見され
た。遺物は壺一、磨製石鏃二があつた、甕棺は石垣の北側
に散在し、凡て合口式である。碧玉製管玉一、細形銅劍
二、銅器若干が副葬品として發掘された。豎穴の一つは
長楕圓形で、下に粘土を敷き墳墓らしく、他の一つは敷
石を残し、あたかも住居跡の如き趣を呈してゐる。この
遺跡は一つにはほゞ相近い時代の各種の營造物の群在す
ることによつて、二つには北九州との著しい類同によつ
て諸學者の注意を惹きつゝある。(據榎本龜次郎氏私信)

○京都帝國大學九州見學旅行記

京都帝國大學國史專攻學生の例年行事の一たる見學旅行は本年は方向を南へとり九州地方を一巡する事となつた。一行は三回生四名、二回生六名、一回生二名の外に大學院學生三名、西田教授御指導藤藤講師に附添はれ貴重な旬日を送り得た事を感謝する次第である。限られた時日の間に九州の重要な地を殆ど見學するため行程に無理を生じ強行軍をつゞけたが、斯く一巡することによつて、此地に遠く神代より傳はる文化の諸相を考察する上に多大の收穫ありし事を信じて疑はない。

十月十三日 瀬戸内海往航

午前九時五十分京都驛發、三宮着、第二波止場より朝日丸に乗船。六甲の山々が霞む程暖い秋晴れで長途の出發に相應しい日であつた。茶話會を船室に開き、自己紹介、その他の談話に花が咲き第一日より旅行の和かな氣分を味ふ。

十四日 (宗像)宗像神社、(博多)管崎宮、香椎宮、元寇防壘址 朝霧の晴れやらぬ門司の港に鯨に移る。潮流が恐ろしく速い。一行の半ばは初めて九州の土を踏むのである。八時四十分門司發。船が遅れて豫定の汽車に乗り得ず、最初から時間が切り詰められて来る。東郷驛で下車、宗像神社の邊津宮に向ふ。

宗像神社。神社は邊津宮に多岐津比賣命、中津宮に市杵島比賣命、沖津宮に多起理毘賣命を祀り天照大神の御神勅により天孫を助け奉らんが爲降臨し給ふたものと傳へられる。邊津宮の境内は如何にも清く澄み、都麩を離れて此處に鎮座まします事が嬉しく感ぜられた。白砂の上に建てられた本殿、拜殿は共に國寶建造物で周圍と調和し

た簡素にして澄明な線の感じには直に神社としての尊い美しさがある。本殿は五間社流造、天正六年大宮司氏貞の建立、拜殿は天正十八年國主小早川隆景の建立と云ふ一同參拜の後寶物を收めた倉へ入れて置く。その中興味あるものは狛犬(國寶)である。石造の一對は一つは玉を持ち高さ臺座共二尺五分、一つは仔を抱いて高さはやや低い。白い硬質の石に堅く、鋭どく、また煩はしきまでに刻む手法は一見して大陸よりの傳來を思はせる。背面に「奉施入宗像宮第三御前寶前建仁元年辛酉藤原友房」とある。木造の一對は高さ二尺六寸、鬘の雄偉な足に羽の附せられて居るもので傳來年所不明である。次いで國寶の阿彌陀經石碑を見る。建久五年宋國より傳來のもの^一と傳へられ、高さ臺座共六尺許、屋根があり、正面は中央を光背形にほり中に阿彌陀佛の像が刻まれ經文は背面にある。左右の側面には假名書の寄進文あり、承久二年庚辰二月十二日、寛喜三年、嘉禎三年丁五月四日等の日附が讀まれる。尙臺石には「正徳五年乙亥十二月吉日」の銘がある。縣下で最も多數に所有すると云ふ古文書は時間

に迫られて全部は見得なかつた。今その眼にし得たもの一部分を列記する。

一、宗像三社縁起（素盞鳴尊と天照大神との御誓約の事を述ぶ）寛永元年月日 貝原篤信謹記

古文書卷一

一、治部卿平親長奉書 八月二日（宗像社修理料として破船を以てするを停旨すべき旨）

一、伏見院院宣 延慶三年

一、繪旨 元弘三年五月十七日大宮司館宛

一、繪旨 正月廿一日、宗像大宮司館宛（建久二年長門國兎徒蜂起之事）

一、八條院廳下文 永萬元年六月廿九日（宗像氏實大宮司職補任事）

一、八條院廳下文 建久五年十一月廿二日（宗像氏國大宮司職補任事）

一、廳宣 寛喜三年三月（曲村田肆拾町を宗像社修理料として充つべき旨）

一、辨官下文 寛喜三年四月五日太宰府に下す（宗像社修理料として難破船の物を充つるを停め曲村田地を社領として寄す）

一、大宮院廳下文 建長八年正月（宗像長氏の子孫をして大宮司職を領掌せしむべき旨）

一、廳宣 弘安十年二月（宗像氏富の申狀に任せ當國大山田

赤馬院得末名を知行せしむべき旨）

一、辨官下文 元弘三年七月廿六日、大宰府に下せるもの、（前略）「諸國輩不論遠近悉以京上、徒妨農業之條、還春撫民之儀、自今以後所被聞此法也云々」（後略）

一、雜訴決斷所牒 建武元年及び二年のもの數通

古文書卷三

一、津守三子申狀 承安五年四月二日

一、阿部清宗愁狀 建永二年二月

一、季秀讓狀 建保五年六月

一、藤原朝臣成毫讓狀 承久三年七月廿一日

一、大藏親秀讓狀 嘉禎二年四月九日

一、沙彌淨惠請文 文永五年七月三日（所領に就きて謀書の事）

一、大中臣經實寄進狀 文永五年七月六日（社領山口郷の地頭職并に地下沙汰人職を寄進すべき由）

一、尼めうあみ假名讓狀 建治二年正月十二日

等種々の形式の興味多き文書が多數に有り、唯目を通すのみに止めねばならなかつたのは甚だ残念であつた。

かくて最初の見學の收獲多き事を喜びつゝ、再び東郷驛へ自動車を走りし、九州の心臓都市博多に入る。宮崎驛で先輩京大俱樂部地方部の方々のお出迎へを受けて先

づ官幣大社宮崎宮に參拜、寶物を見學する。

宮崎宮。宇佐、石清水と併せて日本三八幡に數へられ延喜式の名神大社、當國一ノ宮、「敵國降伏」の扁額を以て有名な宮崎宮である。神社當局の御好意により參拜の後神殿の周圍から見學を始める。

現今の本殿及び拜殿は天文十五年太宰大貳大内義隆勅命を奉し延喜度の結構に倣つて建立したものであり、又樓門及び廻廊は文祿三年征韓の際戰捷報賽の爲め小早川隆景の建立する所、本殿、拜殿、樓門の三樓は何れも國寶建造物である。引き續き寶物倉に入り寶物を見る。主なるものを列擧すれば、

一、宮輪八幡宮縁起 二卷

此の縁起の中に本宮室町時代の古圖を載す。

一、譽田八幡宮縁起寫 二卷

永享五年孟夏二十一日、征夷大將軍右大臣右近衛大將源朝臣撰文の譽田八幡宮縁起を、筑前村山角左衛門正眞謹寫し元祿四年辛未十一月奉納の由貝原篤信の奥書あり。

一、敵國降伏宸翰 三十七葉

醍醐天皇敵國降伏の四字を紺紙に金泥を以て宸書せられたもので、延喜廿一年六月廿一日神託に依て奉納し給ふ所と

傳ふ。

一、孝明天皇諭旨 蠻夷拒絶御祈願之事、嘉永六年以降七ヶ年分

一、同上御祈願初め日限御書附 三通

一、古文書 永祿八年以下十三通

一、大友宗麟神領寄進狀二通、一、本宮御遷宮に付き勸進狀(上筑後衆中宛鑑連外三名連署)一、豊臣秀吉神領寄進狀一通、一、小早川秀秋神領寄進狀一通、一、黒田長政以下累代寄進狀數通

一、大内義隆外九名和歌懷紙 一卷

一、秀吉外五名和歌短冊 一卷

一、唐銅酒瓶 一箇

底銘に奉寄進、大工連種作、八幡宮寶前、天正十五年八月吉日とある

一、唐銅酒瓶 二箇

底銘に謹奉寄進、大工胤吉作、八幡宮崎宮御寶前、永正三年八月吉日とある。

その他武具類、鉦鼓、琴、琵琶、銅燈籠などがあつた。

香椎宮。次で仲哀天皇の行在所の舊址として名高い官幣大社香椎宮に自動車を走らす。神社に於ては既に文書寶物等を陳列して吾々を待たれた。こゝで見學の文書類を列記すれば、

一、源賴朝下文 文治元年二月朔日(寫)

一、足利尊氏寄進狀 建武三年三月九日(寫)

一、香椎宮緣起 一軸(新寫)

寛保改元之夏六月日 榊田涉謹撰 縁起筆者山田行恒

一、香椎宮社領目錄 文政二年十月十五日

「高百二十石、於香椎村」以下を記す

一、香椎宮社家古文書寫一册

三苫、竹内、木下各家のものを集む

次で香椎造りの神殿建築、仲哀天皇古宮御遺蹟、報恩寺址等を見學し、薄暮辭去する。

防壘址 この遺址は長さ十間餘、高さ八尺許りのものが發掘せられてるて略々その構造を推察うる程度のものであるが、これは建治二年三月より八月に至る間、此の地一帯の海岸線に沿ふて長さ約五百十六米に亘り築かれ元寇防禦の偉功を奏したのである。この頃暮色迫るを以て今日の宿泊地二日市に急ぎ武藏温泉壽館に泊る。

十月十五日 (太宰府)水城址、太宰府址、觀世音寺、
太宰府神社、(多久)多久聖廟

温泉に浴して前日の疲勞をすっかり癒し元氣を回復した一行は、午前八時頃同旅館を出發、豫定地の見學に向つた。尙この頃は曇天で後少し雨が降り出したが、大し

た事もない。

水城址 太宰府址の西方に東北より西南に亘つてある日本紀に天智天皇の三年に作られた事が見え、その遺構は今猶千古の跡を留めて横斷する道路の側に斷面を露はしてゐる。

太宰府址 南に大門の址、北に都府樓址があり、其の間諸所に礎石を存してゐる。礎は皆方六尺餘であつて、中央に圓形の座がある。都府樓址は東西十四間、南北六間許、その間に大なる礎石三十許残る。所謂太宰府の淵源を尋ねれば更に古く上代に遡り得るが、今の都府樓址を中心とする地に太宰府が定置されたのは天智天皇の頃かと思はれる。爾來長く地方政治文化の中心となつたが、蒙古襲來以後は北條氏別に探題を置き、その族爲時を遣して博多に鎮せしめ、爾來太宰府は遂に廢せられたのである。吾々はこの礎石の上に立つて往年の結構を推察し感慨深きものがあつた。

觀世音寺 天智天皇の勅願所であつて天平十八年諸堂完成した。古には普門院と號し、太宰府繁榮の頃は鎮西

隨一の巨刹と稱せられた。現存するは本堂及び阿彌陀堂のみで共に元祿元年黒田家三代の藩主光之建造のものとなる。本堂には本尊聖觀音以下凡て五體の巨像を安置してゐる。阿彌陀堂は西面し阿彌陀如來を本尊とし左右に四天王像以下の諸佛體を所狭く配列してある。これらの尊像は何れも地方における上代美術を代表するものとして、既にあまりに有名なるを以て今はすべて注記するを省く。

但國寶の毘沙門天像、大黒天像及び舞樂三面は他所に出品中で拜觀出來なかつたのは残念であつた。

戒壇院 觀世音寺の西隣にある。往昔觀世音寺四十九院の一であつたが、今は博多聖福寺末である。尙このあたり往古寺域を見るべき遺構を説明せられた。

太宰府神社 最後に太宰府町の端にある太宰府神社に參拜し寶物殿を拜觀した。毛利、小早川、大友其他諸氏文書も多數あるが時間がなくゆつくり見學が出來なかつた。現在の本殿は小早川隆景、樓門は石田三成、中門及び廻廊は黒田長政の寄進であると云はれる。以上で太宰

府附近の見學を完了し、二日市驛午前十一時八分發の列車で多久に向つた。

多久聖廟 多久は佐賀市より十里餘り距つた唐津沿線の一小驛で聖廟はこゝより一里足らずの片田舎にある。

聖廟の本殿を恭安殿と云ひ高さ七間、間口八間、奥行十間半の建物。内部はすべて結構壯麗、鱗鳳龜龍草木蟲魚の類を刻み丹漆を塗り、殿の正面には龜を設け中に聖像を安置し向つて右には顔子子思、左には曾子孟子を配して居り、總て唐銅像である。「多久聖廟沿革取調書」に依ると聖像の高さ一尺五寸、顔子一尺二寸五分、子思一尺二寸二分、曾子一尺二寸四分、孟子一尺二寸四分とある。聖像の銘に「文宣王像一位、天祿庚辰歲夏五月甲午鑄成、治工洛陽淳風坊播磨大椽丹貞的拜鑄、南郊仲欽監工」とあり仲欽とは中村暢齋の事である。又椅子の銘に「洛陽寅風坊住、鑄工今井八左衛門光重造、元祿十三曆庚辰初冬穀旦、南郊仲欽監工」と由來を記してゐる。今簡單に此の聖廟の由來を述べると、邑主多久茂文が約二百二十年前計畫創設したもので、日本に於ける聖廟計畫の先驅

をなすものである。茂文は夙に儒學を尊崇し貞享年中聖廟及學校の建立を志し、元祿十二年先づ學校を建て、聖像を校内に安置し、その後寶永五年に至り聖廟が落成した。始め本藩に聖廟建築の旨を願ひ出たのであるが、本藩ではその例がないので、特に之を幕府に伺ひ出た。而るに幕府は先づ當時忍ヶ岡にあつた聖堂を神田駿ヶ臺に移し、翌元祿四年湯島大成殿の落成を見るに至り始めて之を許した。即ち本聖廟は湯島聖堂の建立より十五六年後れるがその聖廟を藩の公設となすべき事を主張した功績は多久邑主にある事は明らかで、その時代の最古なる點、祭式の唐制に據れる點に於て特に價值がある。吾々がこゝを訪れた時は、やがて行はれる祭禮の爲めの祭器など示され、祭官の服裝をして吾々のカメラの前に立つて頂く事も出来た。

多久圖書館 聖廟より十數町の距離にあり、聖廟關係の書籍、同村學者の家の寄託圖書、聖廟の祭器什器、樂器等を藏する。圖書館所藏本目錄に依れば、十三經、二十一史、唐本(經史及雜)、百五十七部、經書九十七部、歷

史百十六部、雜書九百四十八部、合計千三百五十二部を藏してゐる。古文書の類には、

- 一、東原岸舎學訓七ヶ條元治元年子九月、與兵衛(花押)
 - 一、東京岸舎規則(草稿) 文政六年春正月
- 十ヶ條よりなり、多久出身の儒者草場佩川自筆草稿本である。

一、文廟記一卷 奥書に于時元祿十有四年秋九月初七辛卯日多久伊豆稱首百拜敬白、正徳五年乙未五月丁日、從五位下守大學頭、藤原朝臣信篤謹識とある。伊豆守は茂文、鍋島光重の三男で當家を繼いだ人である。

次に寄託圖書點檢簿によつて多久藩の學者の家を探して見ると高取家、鳥越家、須藤家、相浦家、西家、徳永家、梶尾家、田上家などで此等各家の書物も藏してゐるが圖書としては流布のものであり注意すべきものは殆ど見當らぬ有様であつた。この圖書館の位置は山の麓に存し、かゝる小村には珍らしく立派なもので地方青年子女の訓育の中心をなしてゐる。嘗つては學藝の中心地であつたが、昭和の今日訪れる學者も稀な時、西田博士以下吾々の一行を迎へて、館長以下非常な喜びを表せられた寧なる茶菓のもてなしに預り快き印象を與へられた

夕方再び佐賀に引き返す。驛では筥崎同様京大俱樂部の方々のお出迎へを受けて松本屋旅館に入る。旅館では先輩諸子、中には唐津中學からわざわざ出掛けられた數氏の先輩等と夕食を共にし、温い歓迎をうけた。

○十六日 (佐賀、徵古館、(熊本)本妙寺、加藤神社、熊本城 藤崎八幡宮、水前寺公園、出水神社、古今傳授の間)

早朝旅館を出發、當地の見學に従ふ。宿の直ぐ前に松原神社あり、龍造寺父子、鍋島直茂父子及び閑叟公を祀る所である。參拜だけですまして佐嘉神社に詣る。神社は閑叟公を祀り、昭和八年別格官幣社に成つた。未だ木の香も新しい神社である。こゝも參拜だけで徵古館を見學する。

徵古館 多くは舊藩の遺物を藏す。主なものを記して見る。

- 一、多布施反射爐よりの鍊瓦
- 一、紅毛本國使節崎陽鎮台へ書翰拿出の途中行列之圖
- 一、河越藩印刊の日本外史(河越本の原版)
- 一、長崎港填海工事之圖
- 鍋島眞正砲臺造築の爲神之島及び四郎島連絡す
- 一、江藤南日(新平)書狀

一、蝦夷雜圖 安政年間、島國右衛門が開叟公の命を受けて蝦夷探險をなし復命せしもの

一、種痘繪圖 鍋島眞正、西洋にて種痘の發明を聞き嘉永二年取り寄せられ藩臣橋本宗健の一子永叔に植ゑしめ佐賀城にて嫡子淳一郎(直大)に種痘、江戸にて女貞姫に植ゑしめし事蹟を描く。

一、名護屋陣屋圖

一、朝鮮征伐中豊臣秀吉の肥前國に令せる掟

定 肥前國

一 往還之輩一宿木ちんの事壹人に一文馬一疋ニ二文宛出し宿をすべき事

一 ぬかばら薪御方以下一切不可出之事

一 町人百姓に對し非分於申掛者一錢きりたるべき事

右之條々相違輩族者擯捕可上候可被加御誅罰候。若見隱聞隠候付ては以後被聞候共其所々町人百姓可被加御成敗候也

文祿二年正月(朱印)

一、豊臣秀吉朱印狀 慶長二年二月廿一日、第二回朝鮮征伐

の陣中の鍋島加々之守、同信濃守宛

一、愚見集一冊 山本常朝自筆の書、葉隠の精隨とも云ふべきもの。

一、傳加藤清正着用鎧天正十六年清正肥後入國の際、天草伊豆守等從はず、之を討ちし時成富茂安敵首級十一を獲、功

により授けられしものと傳ふ。

以上で佐賀の見學を終つて、熊本へと向ふ。時間の餘裕なく城址を目前に見ながら立寄り得ぬのも残念に思はれた。

午後零時四十八分、五高鈴木教授のお迎へを受けて熊本驛に到着。直ちにバスを利用して市中見學を開始、先づ市の西北金峰山麓に日蓮宗の巨刹發星山本妙寺を訪れた。本妙寺 始め加藤清正が大阪に建立、以て先考清忠君の菩提寺とし、當國入部の後之を熊本城内に移してその歸依僧京都妙傳寺の發星院日直上人を開山としたもので清正の薨後先づ彼の靈廟此處に營まれ、續いて寺も同所に移されたものである。長い參道を上ると正面が清正の廟所「淨池廟」で中央に拜殿その奥に御靈屋あり參詣人雲集し、更に域内には故人の徳を偲ぶべき大木土佐兼能及び韓人金宦の墓あり、共にこれ公の眷遇に感じてその死に殉じた烈義の士を葬る所である。淨池廟を出て左手に當山の本堂があり後陽成天皇の勅願道場として聞え、その隣りの寶物館には清正使用と傳ふる立烏帽子、赤字題

目の旗その他武具を多く、藏し文書としても後陽成天皇後奈良天皇、靈元天皇の繪旨、後陽成天皇宸筆題目、高麗國禁制(天正二十年正月日 秀吉朱印)その他清正、細川三齋、同綱利等の筆蹟其他種々あるが、清正自筆夢のこの書狀を奥深く藏して示さぬ寺の態度には不可解のものがあつた。

加藤神社 もと本妙寺山中清正公廟側の一祠殿であり明治四年神佛分離に際して城内天主閣下に移轉、この時を以て創建とし、後現在の地に移され、西南の役に焼失して其の後の建築にかゝる。祀るところは清正及大木兼能、韓人金宦である。寶物館を簡單に見學した後南側に隣接せる熊本城に向つたがこの頃朝來の曇天は遂に時雨となり慌だしく降りかゝつて來た。

熊本城 地は即ち井芹、坪井の二流に取卷かれた要害として、夙く文明の頃田筑前守秀信及び大永享祿の交鹿子木寂心の據れる所で、加藤清正の肥後守となるや六歳の子を費して熊本城を竣成、嗣子忠廣の改易除封の後細川氏五十四萬石の城地たりしもの、偉觀を天下に誇

つた複合式五層天守閣もその第一及び第二のものを明治十年の兵燹に失ひ、残るは第三天守土櫓のみであるが壘壁高く屹ち濠隍幾重にも繞つて築城の妙を極め、日本

三名城の随一として推稱さるる所以である。宇土櫓内各階には清正、細川氏・西南戦役及熊本鎮台等に關係の遺品を多く刻べ、樓上より望めば北は植木、田原坂、木留吉次越方面より南は川尻、木原山に到る西南役の古戰場を殆ど一眸の中に收める事が出来、是より程近い「くらがり門址」に於ては石垣の表面の著く剝落してゐる狀に炎上當時の猛火も偲ばれ、午砲台(月見櫓址)に立てば綠樹鬱然たる「森郡」の全景觀を恣にする事が出来る。此處より藤崎八幡宮に向ふ、

藤崎八幡宮 承平亂の時、勅願に依り石清水八幡宮を現在城西の藤崎台に勧請せられたもので應神天皇、住吉大神、神功皇后をまつる。九州五所別宮の一として列聖の崇敬篤く、累時の災害にも毎に古式に依り之を造營されたと傳へる、十年の役に藤崎台は激戦の中心となり社殿灰燼に歸した爲、當所に移轉し同十七年本殿(流破風造

柿葺)、幣殿(破風造柿葺)、拜殿(同上)その他の竣工を見るに至つた。社務所に入り寶物及び文書を拜觀した。寶物は、

一、僧形八幡像 女神像(正和年作、國寶)

文書數卷の中武家文書第一卷に收むるところは

一、淡路守書狀 至徳四年六月廿日、藤崎社僧人中宛(地頭方の綺を停止し供僧社人の沙汰に任ずべき事)

一、神官供僧言上 康熙元年六月(戰陣の爲神領の亂され社壇零落せるを復興したき旨)

一、八幡藤崎宮番次第定書『右任先例所盛定也、文明四年壬辰四月十五日 所司政所(花押)』

一、早崎山城守源邦政書狀 文明九年二月廿九日、三郎丸藏人太夫宛

一、重朝書狀 六月二日、出田山城守宛(藤崎宮上葺之事)

一、親員書狀 (永正十六)八月十五、社家宛(おもしろ之調中百姓が社役を勤むべきを命ず)

一、重治書狀 十二月廿六日、藤崎社司供僧宛(歳暮祈願之卷數之事)

一、義武書狀 三月十三日、藤崎宮社家中宛(入國之祈願)

一、義武書狀 十月六日、宮司某外社家宛(入國之祈願及び戦勝報謝)

一、寂心書狀 六月廿日、藤崎宮御中(末永名之事、代地が

來た時には還附すべきを云ふ) 以上

その他武家文書二、三卷、造營文書一、二卷、由緒文書補任關係文書、祭事關係文書、壽永二年舊記、神龍院以下書狀雜等の文書遅くまで熱心に研究した。その間長時間に亘つて多大の便宜を計り下された神社の御厚意を感謝する。

最後に市の東郊詫摩原頭に水前寺公園を訪れた。

出水神社 公園の一隅に鎮座する出水神社は舊熊本藩士が君恩に酬ゆる爲造營する所で、明治十一年の創設に係り、初世藤孝以降詔邦に至る細川家累代の靈を合祀して居る。

水前寺成趣園 水前寺は細川忠利の入國に際し隨從し來つた豊前耶馬溪の羅漢寺の僧玄宅の爲に一字を建立して開山たらしめたもので(後玄宅寺と改稱)其處に設けた御茶屋が成趣園である。現在寺は無く名園のみ存して出水神社附屬地となつてゐるが、其の東海道五十三次に模したと云はれる大小の芝山、滾々たる清流、風流橋、泉石の雅致は折柄の細雨と暮靄の中に溶け込んで限りなき

情趣を味はしめた。

古今傳授の間園を一巡した後池畔綠蔭濃き所に建てる清楚な茅屋の中に古今傳授の間を見た。文雅の道に秀でた幽齋公が桂宮に於て後陽成天皇の御弟智仁親王に古今集奥義をお傳へ申した床しい話は世に知られてゐるが其の緣故に依り當時の茶室を特に明治初年肥後藩に賜はつたものである。室内に飾られた當時の著名な書畫古器の類を懐中電燈の光に依て漸く見學する事が出來た。

以上を以て今日の見學を終り司旅館に投宿した。西田教授の來熊されたのを機會に生れた京大俱樂部の支部より、一行にビールとサイダーを寄贈せられ、旅行に出て以來始めてのアルコールに一同は極めてにぎやかに夕食の膳に向つた。

十七日 (八代)八代宮、懷良親王御墓、悟眞寺
(入吉)入吉城址、裝飾古墳

先輩五高教授鈴木氏を始め數氏の京大俱樂部の方々のお見送りを受け、七時卅五分發の列車で八代に向ふ。八代驛では鈴木氏の御紹介にて八代高女校長の濱岡與一氏等に迎へられて見學の案内をして頂く。

八代宮 舊八代城址にあり、昨昭和八年征西將軍宮懷良親王の五百五十年の忌辰と八代宮鎮座五十年祭にあたり、郡民の總意により宮殿を改築し奉り、大祭を執行して神靈を慰め奉つた由である。時間の都合により文書や寺寶を見せて頂けなかつたのは残念であつた。一同神前に禮拜すれば宮の御事蹟また想起せられて涙新なるものがある。側の天主閣址にのほれば雲仙、三角、天草が遙かに眺められ、近くには水島球磨川の河口が指呼のうちにある。嘗つては城の下まで海水のよせ來た由なるも今は新田開らけて稔りの色も美しい。神社の前にかゝる橋の擬寶珠に元和八年二月吉日の銘がある。これ八代城の完成された年である。

懷良親王御墓、悟眞寺ここより自動車を走らせ、懷良親王の御墓を拜し、悟眞寺に至る。初め護神寺とて天台宗の寺たりしを、延元年間、領主菊池武朝が懷良親王追善の爲に再興し、親王の法號悟眞を以て寺號とした。本尊には釋迦如來を安置し傍に懷良親王の尊牌を祀る。寺寶には同親王及び開山の木像、領主の寄進狀等あり、尙

扁額「悟眞寺」は寛永二十一年大明福建進士黃大倫の筆なりと云ふ。

短時間の見學をすませて、人吉に向ふ。列車は天下の三急流の一なる球磨川の清流に沿ふて走る。人吉驛前の晝食を取る部屋から期待せる裝飾古墳の指示されるのを見ては印象深きものがあつた。

人吉城址 順序として先づ人吉城址に自動車を走らす此の地は相良氏七百年の居住の地なるも其の築城は文明年中のものである。明治丁丑の亂に薩人熊本に破れ、逃れて人吉に入り、四月下旬西郷隆盛も亦來り五月下旬までこの地に據つてゐた。城址は人吉より東南二軒に在り球磨川の天嶮により、日本三名城の一に數へられてゐるのも故ありと思はれた。城内の人吉神社には相良長頼以下累代の靈を祀る。ここの寶物として珍重する織月石は正治三年正月三日第一代長頼が始めて人吉城を修築の時三日月顯はれたる奇石を二の丸の申の方より發見し瑞祥とせるもの、織月城と稱するもこれに由るのである。

裝飾古墳 續いて大村の裝飾古墳を見る。この古墳は

且つて濱田博士が調査され、調査報告書も出てる。驛のすぐ後の岩壁にある多数の横穴でその入口の外壁に色々の物象が浮彫せられてるのである。鞍を置いた馬と思はれるもの、牛兔など、これらの浮彫は其の技術頗る幼稚であつて原始的であるは云ふまでもないが、かくの如き寫生的動物の形像を認むるに於て特に興味を覺ゆるのである。思ふに是等の動物はこの横穴に葬られた人の生前に所有した財産を現はしたもので、其の馬は彼の愛乗するところ、兎は彼の愛惜したものであらうととの推察も目のあたり見て得る感想である。

入吉の見學を終へて本日の宿處たる霧島公園林田温泉に向ふ。午後六時到着。一同ゆつくりと風呂を浴びて強行の疲れをいたはつた。

十八日 霧島神宮（宮崎）宮崎神宮
皇后屋 青島 鶴戸神宮

山の湯の香にほの／＼と夜が明けて温泉宿の一夜に疲勞恢復した吾々は谷向ふの硫黄谷までの散策に秋涼の氣を心ゆくばかり味つた。

十時出發。空はすつかり晴れて、南方眼の下には櫻島

雄姿、さては遙かに開聞嶽の端麗な形が浮び上つて居る見る限り起伏す山腹を縫ふて下れば間近に仰ぐ高千穂峯の容姿は我々を傳説の國、神話の世界に誘ふ。

霧島神宮 瓊々杵尊を祀る霧島神宮、千六百尺の高原に老樹太古の佛を残すうちにその寂びた丹塗りの社殿を拜した時には、この傳説の國に一步近づき得た心地がした。社務所で天逆矛の模型等を見て心を惹かれ乍らも我々は神の國から人の國へ下る。十一時二十三分、霧島神宮前驛發。都城あたりより眺むる高千穂峯の限りなき氣高さは遂に忘れ得ぬものであらう。宮崎驛で京大俱樂部の先輩數氏の御出迎御案内を忝うした。

一宮崎神宮 神都宮崎は先日の御東遷記念大祭の賑ひから未だ醒めぬ様である。神武天皇御東遷より二千六百年の今年、その御發祥の地に來るを得た事を喜びつゝ、一同肅然と襟を正して拜する。神宮附屬の徴古館には嘗つて京大の發掘に係る妻町西都原古墳群の出土物を初めとし眼に著いたものは瓜生、野村柏田古墳、横穴壁畫拓本、日向薩磨大隅の國分寺古瓦、美しい勾玉、管玉の類、多數

の祭器類があつた。

皇后屋 神宮の北方にあり神武天皇御東遷前の御宮址と傳へられる。附近一帯を見下す高地で城内に神宮攝社皇宮神社がある。

青島 此處からは一行も打寛いで青島に向ふ。宮崎より四里。山を降りて見る海はまた別の美しさがある。檳榔樹の葉かけに南洋の情趣を思つた。

鵜戸神宮 再び自動車で更に南下する事七里、此の地の所謂七浦七坂、岬又岬を廻つて鵜戸神宮に來た時は日も暮れ迫つてゐる。社前の奇岩に續く太平洋の蒼茫たる海波を眺め乍ら巖窟内の鷓鴣草葺不合尊を祀る社殿に參詣する氣持は、傳説の國を旅した一日の終りに誠に相應しいものであつた。夜の八時前漸く宮崎歸着。京大俱樂部の方々の御厚意による歓迎會が開かれて短時間とは云へ和氣霽々の中に此の日の疲れも忘れた。斯くて再び驛へ急ぎ夜汽車で宇佐に向つたのである。

十九日 (大分)富貴寺 眞木大堂 彌勒寺文書 大樂寺 宇佐神宮 到津男爵家

午前六時三十八分宇佐驛着直ちに豊後鐵道に乗り替へ

同五十四分高田町に到着、同町中津屋旅館にて朝食を取る。

富貴寺 九時過ぎ自動車にて富貴寺に向ふ。約三十分にして到着。不規則な石段を登ると銀杏の老樹の下に大堂が建つてゐる。大堂は僧仁聞が養老二年に創建したものと傳へられ、桁行三間梁間四間單層、屋根は四注造り四方廻廊であるが後面のみは現存してゐない。藤原後期の國寶建築物である。内陣に安置されてゐる本尊木像阿彌陀如來坐像一軀(國寶)は面相溫雅藤原時代の優作にして手首は近年大修理を加へた由である。本尊の背後の壁には阿彌陀淨土變、内陣の欄子には五智如來が描かれ、内陣の四柱にも佛像の描かれてあつた根跡がかすかに残つてゐる。内陣四圍の梁には草花模様を描かれてをり就中東面のものは今猶鮮明な色彩を残してをり、外陣の欄子には西面に西方淨土、正面に釋迦淨土、東面に藥師淨土が描かれ、其他の柱にも彩色の跡をとゞめ光彩陸離たりし當時の面影を偲ばしめる。本堂の右側、小丘に文永五年の墓石一基仁治四年の墓石二基、その他菩提蒸して往

時を語るものがあつた。十時四十分大堂を辭し自動車にて眞木の大堂に向ふ。

眞木大堂 此の大堂は露の大堂と共に僧仁開の開創に係ると傳へられ嘗て國東六郷に聞えてゐた馬城山傳乗寺の遺物である。往時は七堂伽藍を具へてゐたが大友氏の兵燹に遭つて炎上し本堂と鐘樓のみが現存してゐるが、

これ等も其の後に再建されたものである。内陣に安置されてゐる本尊木像阿彌陀如來坐像一軀、同不動明王及二童子立像三軀、同大威德明王一軀は國寶に指定されてゐる。本尊阿彌陀如來は高さ七尺一寸五分肉身塗漆光澤を發し衣紋流麗にして藤原期の作である。不動明王及二童子像は共に極彩色を彩され明王は高さ八尺三寸迦樓羅縹を負ひて儼然として岩上に起立してゐる。二童子は高さ

四尺二寸合掌扼腕の姿勢にして何れも鎌倉初期の佳作である。大威德明王像は臥牛に跨り三面六臂六足頂上に三面を頂き焰髮開口牙を露し上半身は裸體にして布を斜に纏つてゐる。之も鎌倉初期の作である。猶これ等の佛像の外に各邪鬼をふまへた極彩色の四天王が安置されて居

り藤原時代の様式を備へてゐる。拜觀を終へて午前十一時四十分眞木の大堂を辭し再び宇佐へ向ふ。

彌勒寺文書 宇佐では先輩池田義資氏宅に赴いた。秋の日射を暖く受けた部屋にて晝食の後北良氏所藏の彌勒寺文書(正和より應永に至る)を拜見した。

大樂寺 同家に隣接せる大樂寺は元享年中宇佐宮大宮司宇佐公連の創建に係る寺で、阿彌陀如來、觀音、勢至、四天王の七軀の佛像が何れも國寶に指定されてゐる。本堂にて古文書及び釋迦涅槃圖を拜見した。同寺所藏の古文書はすべて太宰管内志に收録されてゐる。涅槃圖は作支那趣味のある大幅であつた。

宇佐八幡宮 一同參拜の後廻廊にて宇佐八幡古圖を拜見する。この古圖は年號不詳であるが神宮及び神宮寺なる彌勒寺の位置が明記されてゐるので古い宇佐八幡宮を想定する手掛りとなる貴重な作と思はれた。時間迫り石段を驅降りる。

到津男爵家 もとの大宮司家として神宮關係の文書を夥だしく所藏せられるが、此處でも時間に迫られてその

會報

●會員動靜

入會

廣島市廣島文理科大學東洋史研究室

前島 又次氏

同

藤田 四郎氏

同

津田 眞行氏

同

上野 實義氏

(以上杉本直治郎氏紹介)

京都市左京區吉田神樂岡町一岡田貞一方

原田 清氏

京都市北白川小倉町東方文化學院京都研究所

大島 利一氏

(以上内田吟風氏紹介)

京都市左京區淨土寺眞如町二五丹羽方

平山敏次郎氏

(柴田實氏紹介)

東京市神田區神保町

富山房編輯所

東京市豊島區巢鴨五丁目一二二九神崎方

辻村 正吾氏

京都市大文學部考古學研究室

角田 文衛氏

(以上鹽見高年氏紹介)

轉居

廣島市上流川町六二

栗田 元次氏

京都市左京區田中飛鳥井町二二

井上 智勇氏

中の一部を拜見したにすぎないが、其等の中で特に我等の興味をそゝつたものは正和二年八月二十一日付彌勒寺所司の豊後竹田津神供米に關する文書及び建久二年遷宮以下の記録を誌した文書である。後者の紙背に八幡宮神主言上、當宮御領者公家貢進之地、異國征伐之賞也とあるは注意すべく、猶其他文治元年公房文書、文治二年渡文、明德三年御教書、貞和三年太政官符以下多數の鎌倉室町時代の立派な文書を所藏して居られる。若し時間に餘裕があつたらゆつくり拜見させて頂くのと、かへすゝも残念であつた。發車時間が刻々と迫つて來るのであたふたと辭去、宇佐驛に出で、別府に到着したのは午後四時二十二分である。

出帆まで約一時間の餘裕を湊屋旅館にて少憩、紅丸に乗り込んだ。六時出帆、我等は暫しデッキに佇んで夕陽に紫に映ゆる九州の山々に別れを告げた。

最後に此度の旅行中我等見學のため種々便宜を計られた社寺の方達或は先輩諸氏に對する深き感謝の言を以て旅行記のエピローグとし度い。(二回生一同)

名義改稱

關東廳博物館

改稱 旅順博物館

退會

堀田璋左右氏

死亡

沼田 頼輔氏

謹みて哀悼の意を表す

●寄贈交換圖書雜誌目錄

小田先生頌壽記念朝鮮論集

小田 省吾氏

森谷 克己著 支那社會經濟史(各國社會經濟史叢書)

章 華 社

渡邊幾治郎著 明治天皇と立憲政治

學 而 書 院

今西 龍遺著 朝鮮史の葉

朝 鮮 史 學 會

史學雜誌 四六の一、二、三

史 學 會

歷史地理 五六の一、二

日本歷史地理學會

史 潮 四の三

大塚 史 學 會

史 苑 九の一

立教大學史學會

史學研究 六の二

廣島史學研究會

史 學 一三の四

三田 史 學 會

史學論叢 六

立正大學史學會

考古學雜誌 二四の一二、二五の二

考 古 學 會

人類學雜誌 四九の一二、五〇の二、四九卷第四、第五

附錄、五〇卷第二附錄

東京人類學會

社會經濟史學 四の九、一〇、一一

社會經濟史學會

國學院雜誌 四一の一、二、三

國學院大學

文 化 一の一二、二の二

東北帝大文科會

西洋史研究 第六輯

東北帝大西洋史學研究會

經濟論叢 四〇の一、二、三

京大經濟學會

國 史 學 二〇、二一、二二

國 史 學 會

長崎談叢 一五

長崎 史 談 會

宗學研究 九

宗 學 研 究 會

名古屋溫故會報告 一八

名古屋溫故會

鄉土信濃 三の一二、四の一、二

信濃鄉土研究會

日文本化 二

天理 圖 書 館

皇 學 二の四

神宮皇學館々友會

社會學徒 九の一、二、三

社會學徒社

浙江圖書館々葉 三の五

浙江省國立圖書館

東方學報 東京第五冊

東方文化學院東京研究所

史迹と美術 五〇、五一、五二

史迹・美術同放會

國立北平圖書館々葉 八の二

國立北平圖書館

前號訂正

一〇二頁 上段 第七行

遂次[×] 誤

逐次[○] 正

一〇六頁 上段 第十二行

明光の門流ではなかつたとの推測

明光の門流ではなかつたかとの推測

一〇九頁 上段 最後ノ行

舊本福寺記[×]

本福寺舊記[○]

一一〇頁 上段 第十一行

はそれは明かに[×]

にそれは明かに[○]

同 第十二行

撃ぐ[×]

撃ぐ[○]

一一四頁 上段 第二行

示唆を興へものと言へる

示唆を興へるものと言へる[○]

同 下段 第十六行

優勝[×]

優秀[○]

一一五頁 下段 第一行

高都[×]

京都[○]

同 第九行

至つもの

至つたもの[○]

一一九頁 下段 第七行

佐々木篤祐氏の教音院の奥博良氏[×]

佐々木篤祐氏教音院の奥博良氏の[○]